

# 第14報 日高國様似村、様似川上流 新富附近の石灰石

湊 正 雄\* 松 井 愈\*

## I 緒 言

昭和26年夏、囑により、日高國様似村新富附近に發達する石灰石および附近一帯の地質調査に當つた。調査地域は様似村様似市街の東北方、様似川に沿つて上流約10 軒の新富部落を中心とする地域で東西、南北とも約4 軒の範囲である。

目的の石灰石は地域内のエサマンベツ、滝ノ沢、新様似附近に点々と露出しているが、大部分は小規模である。ただエサマンベツ南沢の合流点附近に比較的大規模の2 岩体がある。これらは現在稼行されてはいないが、かつて何度か稼行されたものである。トラツクを通ずる道路が様似に通じており、交通は比較的便利であるから、採掘稼行され得るものである。

この調査はもつばら簡易測量を以て行い、精密な地形測量を施行するに至らなかつたので、その結果については不明確の点が少なく、甚だ不満足なものではあるが、一応ここに報告しておくことにした。種々御配慮をかたじけなうした地下資源調査所の齋藤仁、齋藤昌之、土居繁雄の諸氏に深く感謝する次第である。

## II 地質概説 (第1 図参照)

この地域の地質は上から第四紀層(沖積層および河岸段丘層)、新第三紀層、日高系から構成されている。

第1表

第四紀	沖積層
	河岸段丘層
新第三紀	川端層
日高系	砂岩粘板岩層

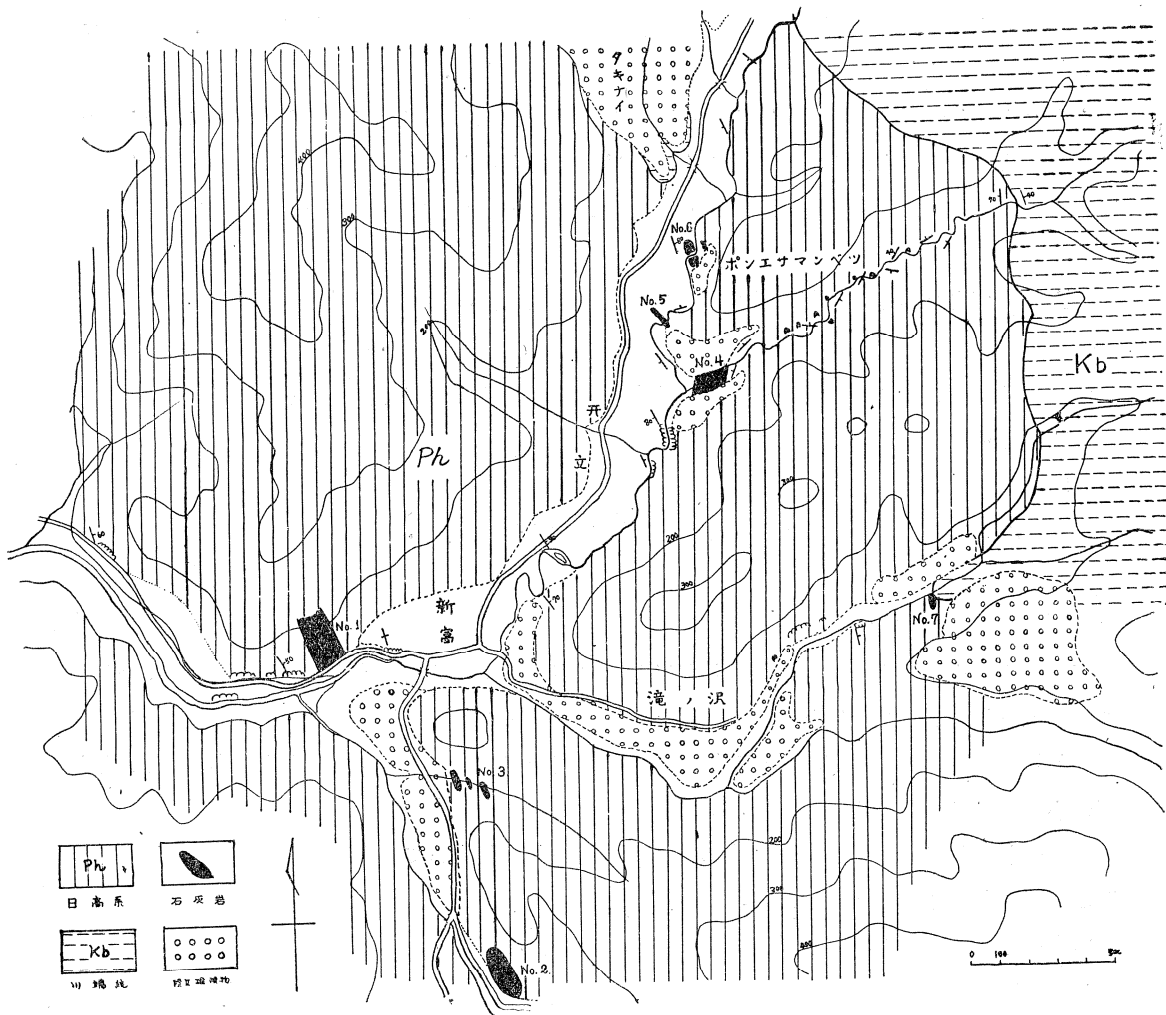
基盤をなす日高系の一般的走向は  $N30^{\circ} \sim 40^{\circ} W$  であるが、種々の擾乱を経て構造は甚だ複雑であり、これに対して新第三紀層の川端層は  $40^{\circ}$  以下のゆるい傾斜をもつて不整合にのり、ほぼ南北方向の軸を持つ向斜構造を呈している。

なお様似川流域には上下2段の河岸段丘が發達しており、いずれも砂礫層をのせている。

### (1) 日高系 : 砂岩粘板岩層

\* 囑 託

本層は粘板岩、砂岩チャートを主とし、時に礫岩、石灰石を含む地層で、本地域に広く分布する。一般走向は  $N 30^{\circ} \sim 40^{\circ} W$  を示すが、非常に擾乱を受けており、走向の変化は甚だしい。一般に急傾斜をなし  $60^{\circ}$  ないし直立を示すことが多い。



第1圖 様似村新富附近の地質圖

様似川本流および各支流に好露出を示しており、多くの断層が認められる。これらの河岸の見取図から判断すれば、本層はほとんど直立しつつも西南から東北に向つて漸次その上部を露わしており、岩質は下部の黒色粘板岩を主とし、時に厚いチャート・砂岩を挟む部分から、上部の砂岩・粘板岩の比較的薄い互層を示す部分に漸移する。また上部では角礫状の礫岩を所々に挟んでいる。石灰石は上、下部を通じて所々に露出するが、下部の岩体は上部のものに比べて大きい。

(2) 川端層

本層はポンエサマンベツより滝ノ沢中流にわたつて分布し、ほぼ南北の方向を持つゆるい向

斜構造をもつて日高系に不整合に乗っている。また所により断層で接することもある。

最下部には厚さ数米、鶏卵大以下の黒色粘板岩、灰色チャートを主とし、輝緑凝灰岩を含む基底礫岩層を有し、上部の砂岩・泥岩互層に移化する。本層下部は一般に著しく凝灰質を呈し、基底礫岩の上位には酸性凝灰岩より変化したと考えられる粘土層を挟む部分がある。ポンエサマンベツでは、上部の緑色粗粒砂岩中より次の化石を産した。

*Acila divaricata* (Hinds), *A. insignis* (Gould), *Yoldia sagittaria* Yok. *Tyhasira bisecta* Conrad, *Cardium cir. ciliatum* Fabricius, *Macoma inquinata* (Desh.), *Macoma dissimilis* Mart., *Maetra* sp., *Searlesia* sp., *Turritella* sp., *Natica* sp., *Callianassa* sp., *Echinarachnius* sp.,

以上の化石内容から本層を石狩地方の川端層に対比した。

### (3) 河岸段丘層

すでに述べたように本地域の河岸段丘は2段あり、段丘面の高さはそれぞれ

120米～160米

200米～250米

であり、上位の面は現河床よりもほぼ80～100米の高さにある。

## Ⅲ 石灰石

石灰石は大小さまざまな不規則塊状を呈し、日高系の砂岩粘板岩層中に発達している。既述のように下部の黒色粘板岩を主とし、厚い砂岩とチャートを挟む部分には比較的大形の石灰石岩体を挟み、(石灰石 No. 1, 3) 上部の砂岩・粘板岩・チャートの互層状をなす部分には石灰石の小岩塊が点々と分布している。

全地域を通じて石灰石の岩体は No. 1 および No. 2 を除いては小規模であり、稼行の対象にはなり得ないものと考えられる。

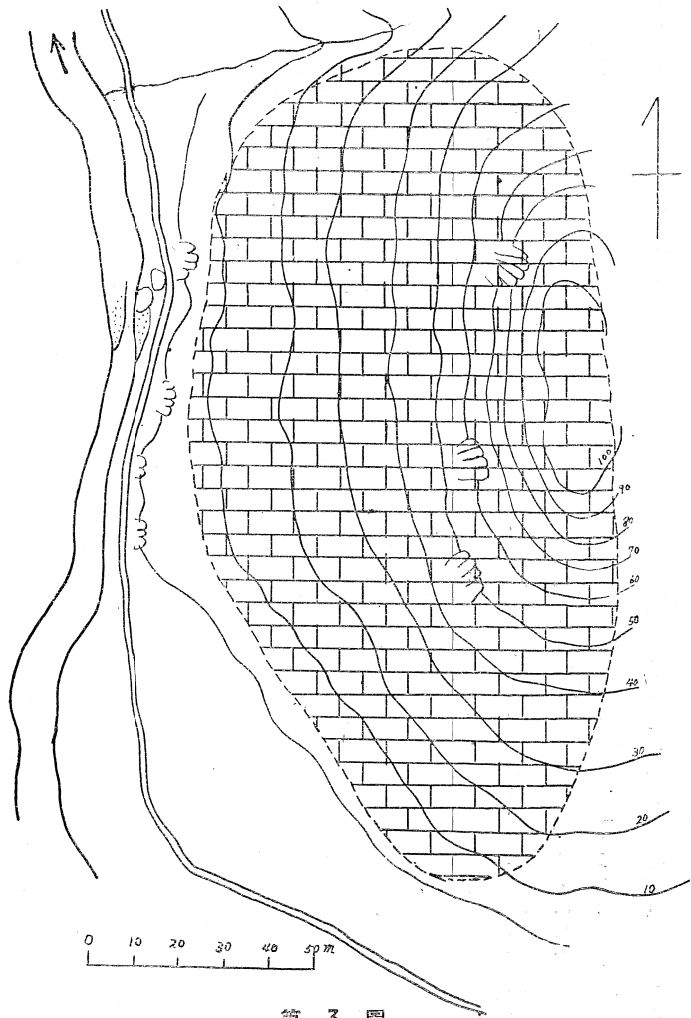
いずれも灰色ないし白色を呈し、化石は見なかつた。

### No. 1 石灰石 (第2図)

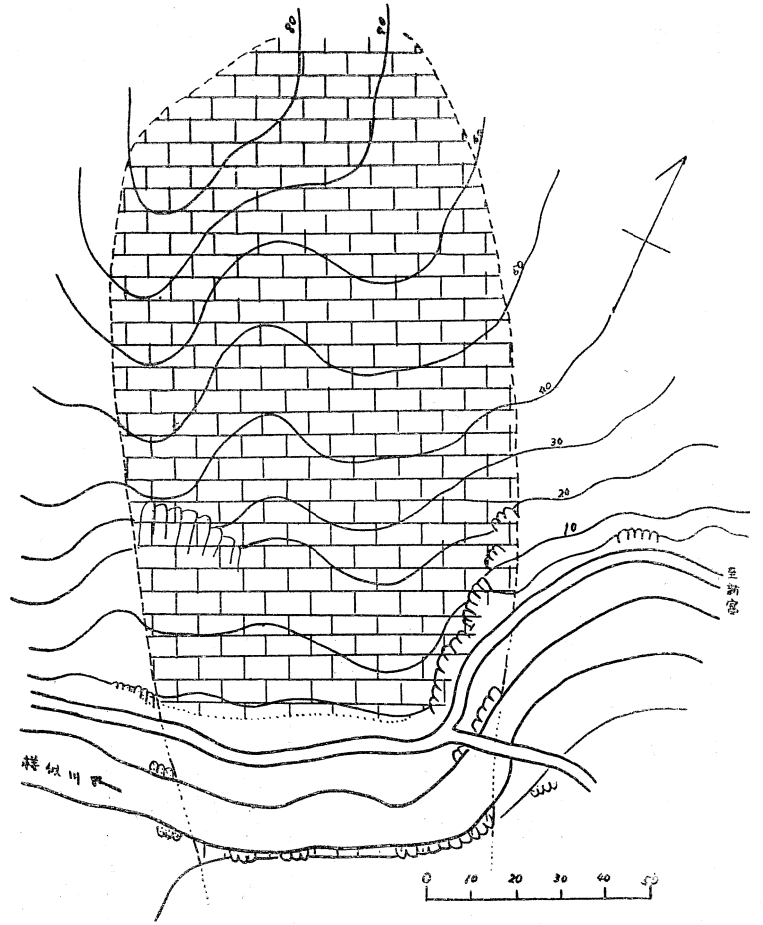
様似川に沿い新富部落よりやや下流右岸の川岸および山腹に露出している。石灰石は N 40° W, 50°E ないし直立の走向傾斜を有する黒色粘板岩とチャートの互層の中に夾在し、100米に近い厚さを有し、灰色ないし灰白色を帯びている。なお、この岩体は様似川の右岸にも崖を作つて露出しているが、沖積層に覆われているためその延長は詳でない。また北方への延長も露出がないので不明である。鉱量は国道の水準以上で1,040,000 吨が推定されるが、地形的条件を考慮すると、可採鉱量は約500,000 吨くらいであろう。

### No. 2 石灰石 (第3図)

エサマンベツ南沢の合流点より約1軒上流、新富から幌満川、雄鳴薬を結ぶ道路に沿つて、川の右岸に瘤状をなして露出している。周囲の地層の露出が悪いため詳細な資料を得ることは



第 3 圖

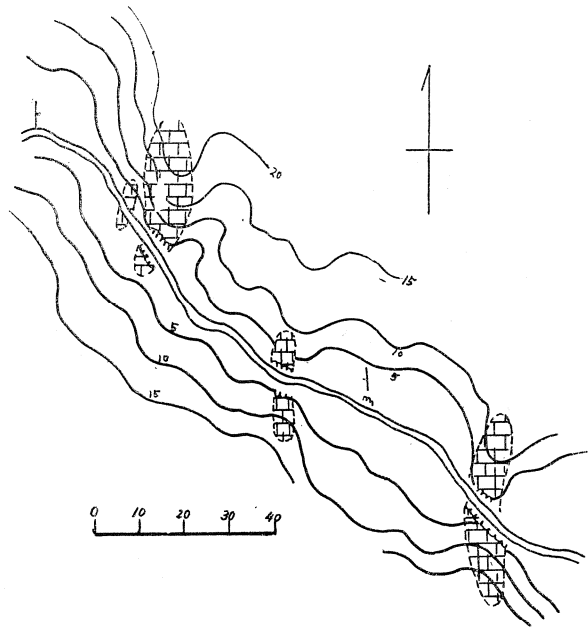


第 2 圖

出来なかつたが、この石灰石岩体の延長方向が No. 1 石灰石の延長方向と一致することから推し、N 40°W 東へ急傾斜する走向傾斜を持つものと考えられる。地形的にも突出した瘤状の山塊を作っており、高さは道路面より 100 米に達する。鉱量は 1,280,000 吨が推定され、地形的にも採掘は比較的容易であり、稼行対象として有望であると考えられる。表土を除いて精確な鉱量を算出することが望ましい。

**No. 3 石灰石 (第 4 図)**

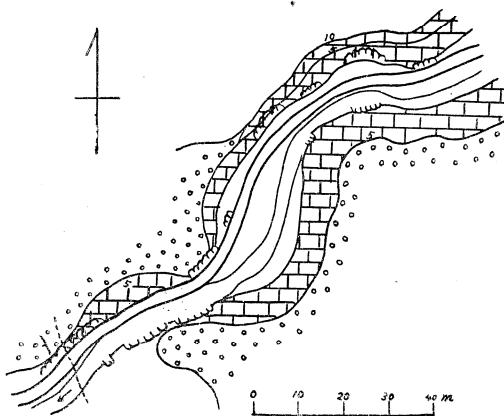
エサマンベツ南沢の合流点より約 400 米上流から東西に入る小支流を 2,300 米さかのぼつた地点に、石灰石の小岩体が 3 個ある。何れもほぼ南方の延長を有し、ほとんど直立した黑色頁岩層に夾在する。厚さは 3 米ないし 7 米でいどで極めて小規模のものにすぎない。



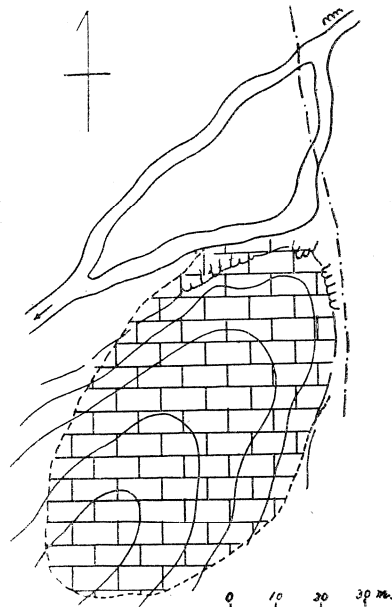
第 4 圖

**No. 4 石灰石 (第 5 図)**

新富部落の中央、小学校附近から東北方向に入る一支流の合流点附近に、沢に沿つて 100 米以上にわたつて露出している。しかし左右両岸とも約 5 米ないし 10 米の高さの河岸段丘によつて切られており。露出の広いわりには鉱量は少なく、稼行の対象とはなり得ない。



第 5 圖



第 6 圖

### No. 5 No. 6 石灰石

ボンエサマンベツ附近の様似川河岸に2.3の石灰石が露出する。No. 5は厚さ約10米, No. 6は厚さ約30米+に達するが, いずれも段丘面に上部を切られており, 鉱量は僅少ある。

### No. 7 石灰石 (第6図)

滝ノ沢中流, 入口から約2軒の川岸に露出する灰色の岩体で, 黒色粘板岩・砂岩の互層中にN10°Eの走向を持ち, ほとんど直立して夾在する, 厚さは50米に近く, 約280,000 吨の鉱量があるものと見積られる。

上記以外には前記 No. 4 石灰岩の支流に8個, 滝ノ沢に1個の小石灰石岩体があるが, いずれも不規則な小塊状のものに過ぎない。その位置は第1図に明示しておいた。

以上を要するに, 本地域には上記の鉱量を明記した3岩体のみで約2,600,000 吨の石灰石があり, 比較的大規模な岩体をなすので, 稼行の対象として有望であると考えられる。